外国から来た児童への日本語指導の具体的な手立て

おもしろくて楽しい方法 51

子どもの日本語教育研究会第３回研究会　2018年12月2日（日）於：兵庫教育大学

発表題目　外国から来た児童への日本語指導の具体的な手立て
―副題　おもしろくて楽しい方法 51―

発表者　村山 勇　所属　麗わくわく会　子どもへの日本語支援ボランティア
（元神戸市立小学校国際教室担当教諭 19年間）

実践の場の特徴
　A小学校の「国際教室」では、外国から初来日してきた児童が在籍学級から離れて一日中日本語の学習を週に10時間ほど集中して行う。毎年留学生の子どもが多数転入して来るので、初級の指導が多い、学習意欲は高いが、環境の変化で緊張している児童も多い。

実践の目標
　この国際教室では、児童がゼロ初級から始めて、生活言語の獲得、低学年の教科書が読めるぐらいまでを目指している。児童が興味をもって日本語学習に取り組めるように、楽しい方法をたくさん考案し、国際教室の定例とする。また全国の日本語指導担当者と交流し、シェアをする。

具体的な実践の内容とその過程
　近年児童向けの日本語学習のテキストは増えてきた。しかし指導者にとっては、読み書きを重視し内容を幅広する学習スタイルが多い。児童の中には日本式の「漢字で書く」という学習スタイルではなく、段階の「聞いて話す」という学習スタイルに慣れている者もいる。その為、学習に集中できないという現象も見られる。そこで発表者は、児童の緊張をほぐし動作やゲームを通じて楽しく自然に日本語を覚えるという技法を51個開発し整理してみた。ほとんどは発表者のオリジナルであるが、「日本語学級１　大歳守久　凡人社」を参考にしたものもある。なおこの内容は、発表者がA小学校の国際教室で日本語指導を担当した 1995年から2000年までのものがである。結果と考察（目標の達成度・課題）
　技法のいくつかは、児童がまねをすることにより覚え、次に本児児童にしてみせるようなり国際教室の伝統として受け継がれていった。児童の緊張がほぐれて、生活言語の獲得や教科書への導入が、早期にできるようになった。全国の日本語指導担当者との交流は十分には行えていない。今後の課題である。

【参考文献】
日本語学級　1,2　大歳守久
ひらこんのかいいにはんご　1,2
日本語児童おもしろネタ集 1,2
外国人児童生徒を教えるためのリライト教材　岡本敦明、光元聡江
読書へのアニマシオン　75の作戦　マリア・モンセラット　サルト
ヴェルボトナル佐久入門　VT1　ロベルジュ.C

子どもの日本語教育研究会第３回研究会　2018年12月2日（日）於：兵庫教育大学

児童Ａ　1年生男子　1997年9月～12月　中国より初来日した。中国では小学校に入学前だったので、学校というものに慣れて無く、教室では座って学習するという習慣がついていなかった。その為、立ち歩いたり物を投げたりすることが多かった。国際教室では、一対一で、学習の準備や教室でのルール等を指導した。言葉の指導では、主に(2)のTPR法を用いて、楽しい雰囲気を作った。また(3)の積み木や(4)のボールを用いる方法で緊張をほぐした。徐々に慣れてきて、(7)の疑問詞や(8)の指相伝法また(11)の宝探しや(16)の相互出題法等で、友達と一緒に活動することができるようになった。在籍学級でも笑顔が増え、落ち着いて学習できるようになってきた。３か月で転居したので終了。

児童Ｂ　2年生女子　1996年9月～1997年3月　マレーシアから初来日し他都市の小学校で3か月過ごした後に本校に転入した。ひらがなの読み書きはできていたが、発音が不明瞭だったりイントネーションが不自然だったりするところが目立った。その為引っ込み思案であまり話さなかった。そこで(5)のVT法や(17)の感情語の実感法、(9)ぬいぐるみの入れ替え、抜き取り、追加法や(21)の手品法等で自然に発話できるように仕掛けた。また(18)の形容詞では、体重計にのって計るなどの実体験をさせた。その否定形や反対語も覚えて文字に結び付けることもした。さらに在籍教室でよくする自己紹介に備えて(22)の自己紹介は指サイン法で練習した。自信をもって話せるようになり、在籍学級での友達が増えた。理解力が高く、７か月で「ひらこんのたのしいにほんご1,2」を終え漢字の力もつき、在籍学級での学習にもどした。

児童Ｃ　1年生女子　1997年9月に中国から初来日した。心臓検診に驚いて泣くなど文化の違いにとまどうこと多かった。また中国への一時帰国が多く、日本語学習の継続が難しかった。特級国に日必ず紹介に備えて(2)の自己紹介は指サイン法で練習した。(20)の写真でクラスメートの名前を覚えた。また身長や性格の言いなを覚えた。在籍教室には、○○さんの覚えた言葉の表をはり、クラスメートから声をかけ易くしてもらった。物語が好きで、(49)のダウトを探せ法や(50)のばらばらも良くて注をよくして、読解力がついてきた。友達も増え表情も明るくなった。

児童Ｄ　5年生男子　2000年4月に中国から初来日した。明るく歌が好きなので、(42)の「て形の歌」や「動詞活用歌」を用いて文法学習をした。(43)の反対歌も自分でいろいろな歌を作り歌っていた。内容をよく理解して、後から来日してきた児童に教えることがよくあった。また在籍学級でも、その歌を披露して好評であった。(35)の漢字の口引法や(36)の漢字パーツでパズルにも興味をもって取り組み、中国と日本の漢字を使い分けることができるようになっていった。基礎学力が高く翻訳教材で理解すると日本語への転化も早かった。

2018.12.2
外国から来た児童への日本語指導の具体的な手立て
～おもしろくて楽しい方法51～
麗わくわく会（元小学校国際教室担当 19年間）　村山勇

（1）話しかけの５原則
　外国から来た子どもにとっては、先生の言葉が命の綱なので、私は話しかける時、次の原則を心掛けている。①簡単な言葉を使い何が簡単かは、子どもによって異なるが、②ゆっくり話はっきり(表情や写真を見せて)③動作をつけて話す。

（2）ＴＰＲ法
　指導者が指示する言葉(動詞の て形)を子どもたちが聞いて、その通りに動きまわる全身反応法と呼ばれる方法である。「立って」、「歩いて」、「止まって」、「すわって」、「えんぴつ、もって」、「なまえ、かいて」という具合である。初めは動作を見せて言い、徐々に動作を減らして言葉だけで行動できるようにしていく。これで学校生活に慣れることを目指している。

（3）ひらがな積み木で、ひらがなを覚える
　①ひらがな積み木を３つ並べる。(五十音の一つの段が良い。)子どもは、ミニカーを好きな積み木にあてて、その文字を言う。指導者は「そう、あしのあ。」と言って、積み木の裏面の文字と絵を見せ、文字と意味を子どもに意識させる。
　②指導者は、ひらがな積み木を一つずつ、子どもの方に渡らせる。子どもは、それを取ってその文字を言う。指導者は、積み木を組みたり並ぎまにして得らせてたりして、子どもが字の形を確実に覚えるようにする。
　③指導者は、５個のひらがな積み木を組み合わせて立体を作る。文字が逆さまだったり、裏の絵だけが見えたりしているのでもよい。子どもは、それを上から一つずつ取っていきながら、その文字を言う。
　④指導者は、積み木を一つずつ、子どもの方に投げる。子どもは受けて、すぐその文字を言う。

（4）ボールの投げ受けでひの製値を取る。
　「ひ」の発音が苦手な子どもには、「あひる、ひよこ、ひ」と言う。苦手な発音が語頭だと言いにくいが、語句だと言い易くなる。そこで、子どもにボールを投げる。子どもはボールを受けて指導者の言った言葉を言う。ボールを受けるのに気を取られてひの製値が取れる。ボールは、柔らかいぬいぐるみのような物の受け易い。ここでは、「ひ」は、「もっと着を引っ張るといい。」と言う、指導者が自分の着の両端を引っ張って見せればよい。

（5）ＶＴ法
　ベルボトナル法である。「おはさん」と「おばあさん」の区別は難しい。そこで、手を空手チョップのように「おはさん」と言いながら、縦に２回動かすと、とても言い易くなる。「おばあさん」は、横に１回、縦に２つの発音やに合わせて、とても言い易くなる。子どもの手を取り、積ませながら、わらべ歌のリズムで手を上下に動かしながら言えば、長文も簡単に言えるようになる。

（6）五十音表
　「あいうえお、おえういあ、かきくけこ、こけくかき。」と元に戻って言う。これによって日本語への慣れができる。やがて語彙を使う時、五十音の前後のかんができて、調べ易くなる。強弱のリズムをつけて、音や手を振ればもっと言い易くなる。横の順に「いきしちにひみいり、うくすつぬふゆるう」というのも楽しい。

（7）疑問法
　複数の子どもの日本語力が同じようならば、競争を取り入れる。指導者は、黒板に形がよく似たひらがなのカードを貼りつける。指導者が「いすのい」と言えば、子どもたちは、「い」のカードを指差しに走って行く。指差すだけの方がカードは痛まないが、時には取ってきても良い。カードは、「あ」、「お」、「い」、「り」、「き」、「ゃ」、「は」、「ほ」、「る」、「ろ」、「め」、「ぬ」、「の」、「れ」、「ね」、「ら」、「も」等が必要である。

（8）数字は、指相伝と数相伝で
　子どもたちが数字を覚えたら、指相伝や数相伝をして、数字を使わせよう。また、ウニのおもちゃで集を描に押していくと、途中でロがしまるのも使える。この時、少し高度な「２、４、６、…」、「10、20、30、…」、「月曜日、火曜日、…」等を言うのも楽しい。

（9）繰いぐるみで単語を覚える。
　①入れ替え：指導者は、５個並べた動物の繰いぐるみの名前を順に教える。子どもは繰り返す。指導者は、順に名前をいていき、子どもは答える。次に、指導者は子どもの すきを見て、ぱっと繰いぐるみの頭番を入れ替える。そして、子どもに繰いぐるみの名前をきく。順番だけで覚えていた子どもは、ここでわかる。最わこで５回様にして、子どもの興味を引き付けることができる。
　②追加：子ども好み入れ替えて覚えたら、指導者はまた子どもの すきを見て、ぱっと別の繰いぐるみを追加する。「新しいのは、どれですか。」と きいて、子どもに取らせる。
　③抜き取り：再び、指導者は、ぱっと一つの繰いぐるみを抜き取り、自分の後ろに隠す。「ないのは、どれですか。」と きく、子どもは見て答えるのではなく、無いものを答えるのだから、しっかり覚えておかねばならない、ゲーム的で楽しい。

（10）ぬりえで体の部分を覚える。
　指導者は人体のイラストを用意する。子どもたちに人体の部分を色を別にして塗るよう指示する。色分けすることで、人体の部分が認識できる。また母語とのずれに気がつく。(英語では leg と foot は別だが、日本語は「足」で両方を指す。)

（11）宝探しで名前の練習
　指導者は教室内のあちこちにいろいろな物を置いておく。指導者が何かの名前を言うと、子どもたちは探し回って見つける。

（12）落下物開発判定器
　指導者は、上部の見えないところにいろいろな物を持ち、一つずつ落とす。子どもたちは、それがすきまを通る時にちらっと見て、名前を当てる。この時、下にタオルを敷いておくと音が出ないので良い。(波多野ファミリスクール大藏氏の考案)

（13）指差し質問に、単語で答える。
　指導者は下宿な日本語を教えようとして、「これは、何ですか？」、「それは、えんぴつです。」という文を教えたがる。しかし、日本語を初めて学ぶ子どもには、まず単語だけを答えさせるほうが良い、そして、段階的に難しくしていくと良い。
　第１段階「なに？」、「えんぴつ」（質問は、「なーに？」と伸ばす方がわかりやすい。）
　第２段階「何ですか？」、「えんぴつです。」第３段階「これは、何ですか？」「これは、えんぴつです。」というふうに、段階的に難しくしていくことをいつも心掛けておきたい。なお、「それ」を使い分ける真理的距離の用法は難しいので、最初はしないほうがよい。

（14）心理的距離について
　Ａ「わたし、あの本取って来て」
　Ｂ「ひいふ、どの本？」(歩いて向こうへ行って)、「この本？」
　Ａ「そう、その本」
　この例で言っているのあ、どの本、この本、その本は全て同じ本である。日本人には簡単だが、外国から来た子にはとても難しい、「その」は普通は、自分よりやや遠いところをさすが、この例では、相手の立場にたって「その本」と言っている。心理的距離の「その」の例である。私は、貧弱をかくとまの例など、いろいろな例を あげて繰り返し練習をさせている。

（15）相互出題
　体の部分や数詞は、子どもたちが相互に出題する。
　①Ａ「ここは何？」、Ｂ「かた」
　②Ａ「首をわって」、Ｂ「ここ」
　③Ａ「これは鉛筆何本？」、Ｂ「三本」
　④Ａ「紙、四枚取って」、Ｂ「はい、四枚」

（16）クイズに答える、クイズを作る。
　指導者は、ぬいぐるみの動物を並べておき、クイズ形式で、「この動物は、何がいますか。」「大きいです。ヒント③、体が大きいです。何でしょう。」「ぞう。」「ぴんぽーん。」などと言う。慣れたら、反対に答えの動物を決めさせ、それにふさわしいクイズを考えさせる。

（17）感情語は、実感させよう。
　指導者は絵のおもちゃを用意しておき、子どもにいきなり見せる。子どもが怖がったら、すかさず「こわい」を教える。水をいきなりさわらせて、「冷たい」を教える。指導者は意下の段に隠れていて、子どもが

実たら、わっと驚かす。子どもがびっくりしたら、すかさず「びっくりした。」というカードを出して、教える。いろいろな状況設定を工夫しよう。

（18）　形容詞を実体験させよう。
　形容詞を学ぶとき、実体験をさせよう。指導者は体重計を用意する。まず子どもが乗ってみる。このとき「わたしは、軽い。」という文を教える。次に、指導者が乗って言う。「先生は、軽い。」と言うと、子どもは「軽いない。」と言う。そこで、「軽くない。」という言い方を教える。さらに、「先生は、重い。」と続ける。この時、右のようなカードを用意しておき、順に見せていく。

なー	かー	かい	
もい	いる	ない	

　なお形容詞（形容動詞）の場合は、「きれいなくつ。」「きれいじゃないくつ。」「またいくつ」という語尾のカードと組カードを見せていく。

（19）　３回言って
　外国から来た子どもたちが「お母さんが急屋でさんまをさんびきかいました。」という文を言葉だけで言おうとすると結構難しいものである。そこで、その平仮空チョップのように引動に動かすと楽が楽しくなる。(ＶＴ法)さらに、「これを３回続けて一息で言って。」と早口言葉にすると、楽しいし日本語に慣れてくる。

（20）　写真で質問しよう。
　指導者は、その子どもの家族の写真やクラスの集合写真を用意し、子どもに質問をする。低レベルから始めて、徐々に難しくしていく。「この人は、男ですか、女ですか。」、「背が高いですか。」、「やさしいですか。」、「この人好きですか。」、「それは、どうしてですか。」等、（はい）や「いいえ」で答えられるものから、説明を必要とするものへと進化させていく。

（21）　手品で言葉を覚えよう。
　指導者は簡単な手品を子どもたちに見せて、言葉や文を印象づけよう。指導者は１個の消しゴムを子どもたちに見せ、左右どちらか赤の手のひらに隠す。「ある。」「ない。」「どっちにある。」、「こっちにある。」等を教える。もちろん「ます形」での言い方も教える。指導者は結末を（同じ手、さらにもう１回出る、はさみでどこかの空き方へ切り取る、「開いたら、穴はいくつ？」）子どもたちに予想させる。発表場所により穴の数が変わるので楽しい。また結末１回折り、カッターナイフで切る。「何枚になった？」と子どもたちに尋ねる。「２枚」と答えたら、２枚を見せる。さらにその２枚を折る。同じようにカッターナイフで真中を切る。「何枚になった？」と子どもたちに尋ねる。「４枚」と答えたら、「３枚です。」と言って見せる。カッターナイフを使うと必ず驚きを与えているのである。

（22）　自己紹介は指サインでヘルプ
　子どもが来日したばかりで、日本語のカが全くもない、しかも指導者がその子の母語が使えないときも、子どもは自己紹介をする機会がある。自己紹介の仕方を口ラうに教えても、子どもは果たが分かっていない。そこで、質疑と日本語を結び付ける方法である。その自己紹介を順序、持たせる。指差し質問し、「ぼくは、（わたしは）○○です。」と教える。次に、世界地図のとの子その国の位置にその国旗を立てる。その子の自己紹介を順序の時行順に切り分ける。そして、その国から日本へ向かって飛んでくる、このとき、「○○から来ました。」を教える。年齢は、指で出し、「○才です。」と教える。お詳細をする動作で、「よろしく、お願いします。」を教える。最後で、その子どもが自己紹介する際には、指導者はクラスメートの拠ろから、指で、「ぼく、飛行機、数字」等のサインを送り、手助けする。

（23）　初心者にも冗談を
　最初から冗談を言って、子どもたちの５秒すがいたいものである。指導者は、子どもに今約をきく、次に自分の約束をだずねさせる。「ゆくさい」と答えると笑顔とが起り、雰囲、「あた、東京行ってる？」、「うん」、「えぇー」、「ただしおもちゃの家」というぐあいである。足のサイズ、将来なりたい職業等大げさに言い合えば楽しい。

（24）　教室にカードを揃ろう
　教室にある物にその名前のカードをひらがな（外来語ならカタカナ）と漢字で書いて貼っておく。習慣から目にすることで記憶が増え、同時に動詞の活用カードも揃っておく、ドアに、「トイレに行きます。トイレに行ってもいいですか。」、本棚に、「本を読みます。本を読んでもいいですか。」、刷事用の名前には、「もんだいをすります。えんぴつをけずってもいいですか。」等のカードを貼っておくと、生活で使える言葉が早く身に付く。

（25）　動詞・形容詞カードを使って覚えよう
　動詞カードの表面には、動作をしているイラストを描く。イラストと文字の意味がぴったりしていて、子どもたちの生活によくある場面を選び、シンプルに描く。動詞のグループ、五グループ、五グループを区別する数字も書いておく。裏面には、「辞書形」、「ます形」、「て形」にあたる「かく、かきます、かいて」、「くる、きます、きて」、「する、します、して」等の文字を書き込んでおく。使い方は、カードを三つの形を覚える。同音で意義語には注意をさる。(聞きます、起きます、来ます。寄ます等)②イラストの面を机の上にバラバラに置き、指導者がエつの形のどれかを言い、子どもたちが取る。③指導者が動詞の目の語を言い、子どもたちが該当な動詞を取る。答えは複数ある。(例)指導者「本」、子どもたち「読みます」、「取ります」、「開けます」等がある。同様に、形容詞カードにもイラストと、辞書形、連結形、過去形を「たかい、たかくて、たかかった」のように書いておく。カードはラミネーターにかけて表面保護をしておくと、子どもたちの乱暴な使用にも耐えることができる。

（26）　名詞・短文づくり
　すごろくの一つの枠に対応なこつのイラストを描くと記憶が心易い。イラストを所定の用紙に張りつける。その文字は、別の紙を張りつけて隠しておき、めくって見られるようにしておく、何度も繰り返すことがねらいなので、双六のスタートとゴールの少し手前に、「振り出しへもどる」が１回だけのシンプルなだけよい。子どもたちの日本語力に差がある場合は、普通のサイコロの他に「－３、－１、－２、１、２、３」と書かれたサイコロを使うと楽しい。あいさつやももちの、学校の施設等は、外国の子どもの母語と日本語を併記したすごろくを作ると、これを原学級へ戻し出し、そこでクラスメートとやりとりする。外国人児童は日本語を学び、日本人児童は外国語を学ぶことが楽しくできる。

（27）　形容詞すごろく
　「なお形容詞」は文字を書き込める時、「きれいな」と「な」を強調した方が良い。答え方は、①「高い」と形容詞だけを言う、②「高い山」とも回を付けて言う、③「この山は高いです。」④「高くないです。」、⑤「高かった」等、何通りもできる。名詞すごろくと同様に文字は隠し、必要に応じて表面保護をしておくと良い。

（28）　動詞すごろく
　これも、すごろくの一つの枠に意味が対になるこつのイラストを描くと記憶が心易い。「止まる」と「止める」等の自動詞と他動詞の組み合わせはイラストを工夫しなければならない。答え方は、辞書形、ます形、て形、否定形、過去形等と使い分けるようにする。

（29）　文作りすごろく
　すごろくの一つの枠に、形容詞と動詞を描く、子どもは、(暑い)ので(泳ぎ)ます。のように答える。同様に、(　)だから、(　)します、いろいろな文型になるような形容詞と動詞の組み合わせを考える。

（30）　既成の教育すごろくの利用
　指導者は既成の教育だけのすごろくを用意する。その数字に赤、青、黄色の色を適当に塗る。次に各色の問題文を作る。(例)赤は漢字の問題：にんべんの漢字を書きましょう。青は学習問題：日本で一番高いのは何ですか。黄色は九九の問題：答えが36になる九九を言いましょう。

（31）　文作りさいころ
　指導者は、人物のイラストを張りつけたさいころと場所のイラストを張りつけたさいころを用意する。子どもは、それらを振り、出たイラストを使って適当な文をつくる。例「おばあさん」と「公園」が出たら、「おばあさんは公園をさんぽします。」と作る。

（32）　文つくりルーレット
　ルーレットは簡単な構造にする。人物、場所、形容詞、名詞、動詞のイラストがある５種類のルーレットを用意する。子どもは、その内の３種類のルーレットを回す、出た３種類のイラストの言葉を使い、他の２種類の言葉を補って適当な文作る。
　(例)先のチは、グランドで、思い入ハットで野球をした。

（33）　ビンゴ
　指導者は、５ますｘ５ますの枠の準紙を用意する。それぞれの枠には好めの切り込みが入れてある。ここには、イラストのカードを挿し込むことができる。名詞、形容詞、動詞等のジャンル別のイラストカードを用意する。子どもたちは、ジャンルが決まったら、自分の好きな順にイラストカードを切り込みに挿し込んでいく。指導者が読み上げるのを聞き、ビンゴをチェックしていく。慣れてきたら、単語は、先に子どもたちに書き込ませよう。

（34）　形容詞下の人間や体を描こう
　指導者は、形容名ます形容詞の言葉カードを各３枚ずつ用意する。また、人の顔や体の部分を表す言葉のカードを１枚ずつ用意する。一人の子どもは、「大きな・口」のように、形容詞と名詞の組み合わせを選んでいく。もう１人の子どもは、それを見て、その絵を描く、「できあがった人物は、あなたの好きな人です。」とよいうおもかつこ。

（35）　漢字は口引法で
　漢字はパーツ単語を持つと覚えやすい。まず最小パーツごとの言い方を学習しておく。言い方は、下村式口唱法の「たて、よこ、かぎ、はね、左払い、右払い、持ち上げ、てん」等を使う。次に中間パーツとなる各種や発を、その言い方で言う。例えば「よこ、たてはね、持ち上げ、てーん」とか「たて、かぎ、そこし、くち」等と覚える。さらに、それらを組み合わせて「さん、ひと、ひで等」と覚える。これは指導者と子どもたちでゲームをすることもできる。「ひ、じゅうで何？」「早い」という具合である。

（36）　漢字パーツでパズル
　指導者はセンチ角づらいの厚紙で、表面には漢字が書かれ、裏面には、その音訓が　書かれたカードを用意する。それを重ね順の切れ目や線と空のなかれ目で切る。和どの漢字はここにかかるが、切れ目が良ければもっと多くのパーツに切って良い。切り分けたそれぞれのパーツの裏に指福引を当りつける。数枚の漢字のパーツを混ぜ合わせて組気風船に貼る。子どもたちは、その中から、一つの漢字になるパーツを選び出し、くっつけて漢字を完成させていく。子どもたちが偏と旁に意識が向かうようになってくる。難しい漢字は、切れ目に薄く色を入り、ヒントにしてもよい。

（37）　指語訳付き単語カード(七か国語)
　兵庫県国際交流協会と連携して、生活科、算数、理科、社会科の 400 の学習単語を日本語と母語を併用して学習していけるよう制作した。Ａ～４の用紙にワードのテキストボックス枠を８個(片側４個)取る。表の面の一つの枠に学習単語のイラストを描き、文字を日本語で書く。裏面の一つの枠にイラストは描かないで、日本語、母語を書く。母語表記は５言語(英語、中国語、韓国語、スペイン語、ポルトガル語、フィリピノ語)の多文化サポーター(に依頼した。同様に、小学校の全漢字の６言語対訳集も制作した。これらの教材は独ささずに拡散化を図るために、兵庫県国際交流協会のホームページに掲載されているので利用して頂きたい。(兵庫県国際交流協会ホームページ➡多文化共生社会づくりを支援する方へ➡教える学ぶための教材➡学習支援教材)

（38）　言語録音テープ
　国語や社会科の教科書を録音して、子どもたちが自宅で学習できるようにする。①初心者には文節ごとに区切って読み、さらに子どもたちがまねして言えるように空白部分をつける。②中級者には普通の速さで日本語の一文を読み、次に一文ごとの母語訳部をネイティブスピーカーの朗読でいれる。子どもの母語能力の保持伸張につながる。また保護者が子どもの学習内容を知ることができる。耳慣のラテン系の子にも良い。

（39）　文作り短冊
　外国から来た子どもたちに日記を書かせようとして、日本語の記憶がしづらく、前後関係が混乱する場合がある。そこで、「昨日、どこで、だれが、何を、どうした、どんなだった。どう思った。これからどうしたい。」等の材料となる言葉をカードにして用意しておく。子どもから様子を聞き出しながら、カードを並べて行き、一文を作る。それを繰り返して、全文を作る。その後、子どもたちはそれをノートに写して日記を完成させる。

（40）　穴埋め作文
　既成の作文の中のいくつかの部分を消して空欄にする。そこを子どもに埋めさせる。教科書の文も同様に使える。

（41）　辞書は、ひらがな引き
　ローマ字で引く「日本語・母語辞書」の中には、「先生」が「sensei」や水槽が「suisou」となっているものが多い。また「ち」が「chi」「ti」、「つ」が「tsu」「tu」と混在している。これでは正しい日本語力が身につかない。ひらがな引きの辞書を薦める。

（42）　日本語教授法を取り入れ、子ども向けに応用した替え歌（どどらもＡＢＣの歌の替え歌）
　① て形の歌
　　うつる　は、って、むぶぬ　は、んで、す　は　して　く　は　いて、
　　ぐ　は　いで　ですよ。きて、して、たべて、いって、みて、おぼえて。
　② 動詞活用歌

ます形	Ａ かく	Ａ かきます	Ａ かいて ください	Ｂ かき ません	Ａ かき ましょう	Ｂ かき ました
普通形	Ａ かける	Ａ かいている	Ａ かいて	Ｂ かかない	Ａ かこう	Ｂ かいた
命令・使役等	Ａ かけ	Ｂ かき たくない	Ａ かかせる	Ｂ かかれる	Ｂ かか される	

（43）　反対歌
　否定形の練習も反対言葉の替え歌を作ると楽しい。トトロの曲さんぽも、「歩かない、歩かない、わたしは元気じゃない、歩くの、だいきらい、どんどど行かない。」と歌う。

（44）　生活言語と学習言語
　２年生の国語のテスト、「しじゃくのｎきょく、べつのじしゃくのｎきょく を近づけると、(　)あいます。「(にげる)や「反発する」はみとなる。正解は、「しりぞけあう」である。このなじみのない言葉が学習言語であり、使えるように練習している。

（45）　自動詞・他動詞
　理科の実験で、用たことでは、水面がよがったと書き、分かったことでは、水面をよわたと書くことがある。自動詞・他動詞の使い分け練習は主語とあわせて、イラストを使っています。

（46）　母語教育も必要、でも指導者は母語はができない
　ＮＨＫのラジオやテレビの語学講座のテキストやインターネットニュースを活用している。

（47）　母国の紹介記事を作ろう
　インターネットで母国の資料を集め、母語と日本語で紹介する。自尊感情も高まる。

（48）文部科学省よりＪＳＬカリキュラムを活用しよう(私も制作委員の一人である)
　これは国策したカリキュラムではなく、学び方を学ぶためのものである。今後各地の指導者に「最終報告書」の指導案やＡＬカードを活用、応用、改良していただきたい。

（49）　ダウトを探せ、「読書へのアニマシオン」の活用
　「読書へのアニマシオン」の技法の一つである。指導者は一回目は正しく読み聞かせる。二回目は、わざと間違えて読み、そこを子どもたちに発見させる。指導者は、どの言葉を変えるか、様々な仕掛けを用意しておく。これで、子どもたちの注意力を育てる。

（50）　ばらばらを探して、「読書へのアニマシオン」の活用
　指導者が教科書の中の物語文（説明文でも可）を読む。それに出てくる何枚かの絵をばらばらに子どもに示す。「今聞いたとおりの場面に並べて」と促す。並べ終わったら、「それぞれの絵で、だれが何をしているか説明して。」と促す。「順番が正しい、原文に近い。」を良しとするのではなく、「自分の言葉で、理解の違も説明ができていたら。」も判断の基準にする。
　「おむすびころりん」は、小学校１年生の教科書の物語文である。書き出しは、「むかしむかしのはなしだよ、やまのはたけがやくて、おなかがすいたおじいさん、そろそろおむすびがたべよう、つつみひろげたそのとたん、おむすびひとつこぼがって、ころころころんかけだした。」である。また絵は、「おじいさんが切り株に座っている、ところから始まっている。実際にやってみると、文体、絵の様子、１ページの枚数等、疑問が出てくる。子どもたちの学力は千差万別であり、日本の子たちよりもさらなる工夫が必要である。

（51）　リライトの活用
　教科書の文は、外国人児童にはとても難しい。そこで、内容を変えない程度に文を簡単にし、文の数を増らす。(リライト(書き直しの意味)及びに絵は数たに描いて増やす。一文と一絵が対応するように)外国人児童もとっつき易くなる。さらにリライト文の穴埋めなどテストを作る。(参考：「外国人児童生徒を教えるためのリライト教材　ふくろう出版)